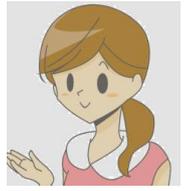


シナリオ 3

真一郎の職場 地震発生直後



真一郎



美人 OL はるか

【場面設定】

営業回りの社員を送り出し、真一郎は神戸出張の準備をしていた。

真一郎が勤める証券会社の事務所は、姫路駅前の雑居ビルの5階にある。窓から大手前通りを見下ろすと、コートやダウンジャケットに身を固めた歩行者が、点滅しかけた信号に目をやりながら横断歩道を小走りに駆けていくのが見える。

「外は寒そうだな・・・」とつぶやきながら壁際の更衣ロッカーを開け、バーバリーのトレンチコートを取りだした。

「課長、お帰りの予定は？」少し甘えたような声で尋ねてきたのは、部下のはるかだった。

入社3年目で仕事にも慣れ、明るい性格と端正な顔立ちのはるかは、男性社員の人気の的だった。「うん、今日は打ち合わせのあと、取引先との懇親会の予定があるので、会社には戻らないから。」真一郎がそう答えると、はるかはちょっと寂しそうに目を伏せながら、「そうですか・・・じゃあお気をつけて」と言って、カバンを差し出した。

「ありがとう」真一郎がカバンに手をのぼした時、壁が「ミシッ」と音をたて、次の瞬間、ドド〜と突き上げるような強い揺れが起こった。

「きゃー！」はるかがカバンを投げ出し悲鳴を上げながら真一郎に抱きついてきた。真一郎は、はるかを抱き止めたものの、激しい揺れに耐えられず、抱き合ったまま、床に倒れこんでしまった。



咄嗟だったが、はるかをかばおうと覆いかぶさった真一郎の背中にダンボール箱のようなものが、どすつと落ちてきた。

「うっ・・・」衝撃にうめきながらも、はるかを守れたことに真一郎は、ちょっぴり喜びを感じていた。

揺れが収まったあと、痛みに耐えながら立ち上がってあたりを見回すと、倒れたロッカー、飛び散った書類・・・惨たんたる有り様だった。部屋に残っ

ていた数人の部下もぼ然としている。

真一郎は、自宅や家族の安否が頭をよぎったが、まずは、課長として、この場の対応をしなければならぬと思った。

【議論のポイント】

- ・平素から災害に備えて、職場で気をつけておくことはなんでしょうか。
- ・自分が、主人公（真一郎）になったつもりで、状況をイメージし、その行動や避難所到着まで、起こりうることや気をつけるべきことを考えてみましょう。

シナリオ 3 続編

真一郎の職場 ～大規模避難場所到着まで

【行動シミュレーション】

その時、床に座り込んでいるはるかと目が合った。すがるような目で真一郎を見つめている。

抱き起こしてやりたいと強く思ったが、ほかの女性社員も同じように怯えて床に座り込んだままなのでそうもいかなかった。

そして、社員の中には、**自分と同じように落下物が当たったのだろうか、額から血を流している者もいた。**

そうだ、まず社員の安否確認をしなければ。「全員無事か？ 岡田さん確認してくれ」「それから中田君、外回りしている者の安否確認だ。手分けして連絡をとってくれ！」はるかへの思いを抑えて、課長らしく部下に指示をだした。

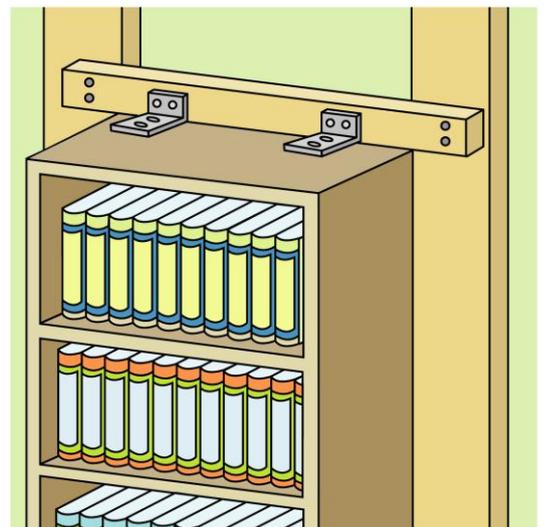
事務所にいた社員のうち数人が負傷していたがいずれも軽症であった。

「課長、電話がつながりません。営業の者と連絡が取れません。」と中田が大声で叫んだ。「そうか、じゃあメールで送ってくれ。」と真一郎は中田に指示した。

「みんな無事でいてくれればいいが・・・」と部下の安否を気遣った。突然妻のゆかりの顔が脳裏に浮かんだ。

「ゆかり、美穂、翔太・・・無事でいてくれ・・・」そう心でつぶやいた時、ガタガタガタとおお

ロッカー等の収納用具は、L字金具などで、壁に固定しておきましょう。また、その上に物をのせないようにしましょう。

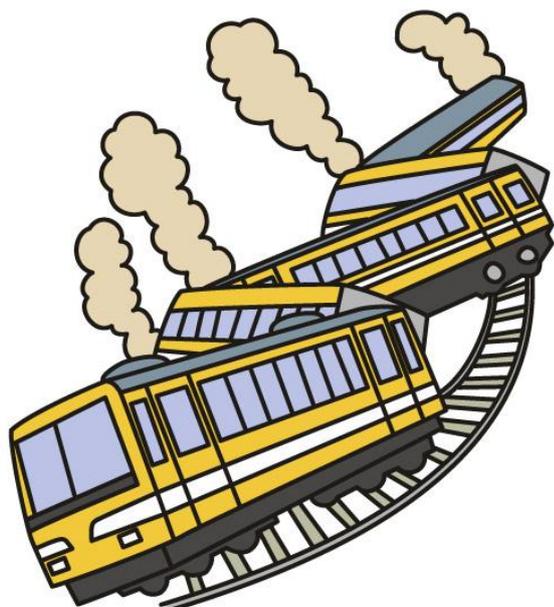


きな揺れがあった。

「わーっ きゃあー」事務所に悲鳴が湧き起こった。
とっさに机の下にもぐりこんで机の脚をつかんだ。

すぐに机の下などに隠れ、余震がおさまるまで頭と体を守りましょう。

そこへはるかが這いながらやってきた。真一郎は手を伸ばしてはるかを机の下に引き入れた。他の者も机の下にもぐって机の足を必死でつかんで揺れに耐えていた。長い余震だった。ようやく揺れが収まった。



真一郎は、以前テレビでみた、阪神・淡路大震災の惨状を思いだした。横倒しになった高速道路、その高速道路から半分落ちかけた大型バス、大きなビルも崩れて横倒しになっていた。大火災も発生した。

会社が入居しているこのビルは、相当老朽化しており、たぶん耐震補強もしていないんじゃないか……。

倒壊するかもわからない……という思いが脳裏をかすめた。

「よし、ひとまず、全員をビルから出して、屋外の安全な場所に避難させよう。」

勤務場所であるビルの耐震補強については、必ず確認しておきましょう。

真一郎は自分に言い聞かせるように独り言を言いながら拳を握り締めた。

「みんな 聞いてくれ！ 全員このビルから避難しよう！」と大きな声を張り上げた。すると「課長、どこへ避難するんですか？」と部下の一人。

「あー、えーと、避難所ってどこだっけ？ 誰か知らないか？」

みんな顔を見合わせながら知らないという表情をした。「うーん とりあえずビルから外へ出よう。」と真一郎。

「あ、それと、避難する前にみんなで大事な書類を集めてくれ。」

「課長、大事な書類ってどんな書類でしょうか？」と別の部下。

「馬鹿！ そんなこと自分で判断しろ！」と真一郎。的確な指示が来ない自分と頼りにならない部下。

真一郎は腹立たしさで思わず大きな声を張り上げてしまった。

「みんな 急いでこのビルを出よう。岡田さん、みんなを先導し

避難の際に持ち出すものはあらかじめ決めておきましょう。



てくれ。」

岡田が女子社員を促してエレベーターホールの方へ向かった。

停電はしていないらしく、エレベーターは動いている。

岡田が、**エレベーターの下りのボタンを押してエレベーターを呼んだ。**

エレベーターの扉が開いて岡田が乗り込もうとしたとき、中田が一言、「岡田さん、**階段を使いましょう。**」 岡田もその意味がすぐにわかって、みんなを階段室に誘導した。



地震後のエレベーター使用は厳禁です。

数分後、全員ビルの外に出たもののどこへ行けばいいかわからず、ひとかたまりになってあたりを伺っていた。

また、グラグラと大きく揺れた。みんなその場にしゃがみ込んだところ、**上から、外壁のタイルがバラバラと落ちてきた。地面に叩きつけられたタイルが飛び散って、何人かの女性社員の足に当たった。「きゃー、痛い！」** みんな慌ててビルから離れた。

幸いタイルの直撃に遭ったものはなく、女性社員もかすり傷だった。
ビル街は危険だ。

真一郎は、しばらく広い公園に避難しようと思いついて、全員で三の丸広場を目指して歩き出した。ビルの窓ガラスが割れたのだろう、**歩道にガラスが散乱しているのを見て、みんなビルから離れて歩くようにした。**

後ろを歩いていた、はるかが小走りで真一郎に追いついてきた。二人は眼を合わせたが特に言葉は交わさず並んで歩いた。

10分少し歩いて大手前公園に着いた。おおぜいの人が避難してきている。

真一郎は、知らなかったが大手前公園は大規模避難場所として指定されている。

観光客らしき人も沢山いるようだ。

地理不案内の観光客は俺たち以上に不安だろうなとつぶやきながら、これから先の対応も思いつかないまま、長い一日になるだろうことは確信して深いため息をつく真一郎だった。

地震直後のビル街の移動は
とても危険です。
ビルから離れて歩き、まずは
オープンスペースを目指し
ましょう。